へ 13
3606

36. 1078

昭36年5月23日寄
神保五彌氏贈

特
門 へ 13
號 3606
卷

志道

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世代和田の系。八十餘日の高系。誠乃道代生し。[illegible]の[illegible]流儒の[illegible]

[illegible]世後[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一支那。梁慶帝の主。一篇の書を著述して。
志の形体を縁に縁に無言説と標題す。王修中
排に斥るの戯言を出すの罪を説
さず。佛祖の妙旨を根拠とし。自見の切先
を研ぐ。旭案因麟の西土が論ずる所なり。
法顧にして矢合として。文宣の指を
斬人とす。始皇帝は書を焼き。儒を坑にせしも。
天命に任せて盛し。二世にして後に梁の為
に亡ぶ。宋唐を佛を蔵にしてそうち 亦す

刑を蒙る。重衡八南都の寺に焦土せし故。
天誅の宜なる報のとし。世に太政の堂を焼亡
の罪と。宗を礎とするの文字に異なりしが故を。
法に因由あり世無く名因縁に利ある所にし故。
頭を作七分の打落れ。蓮座あらんや。斬主
前の名にふるる。二千戈の形なる体を破経の指を
もって推ぎ。微かにして焼き折るものなり。二十
てと文字の言葉の外にかくぎ作せしむ。支那
の志を依りて檀人との世を立て南奥の

むさしけなんと。風来子が序文の毫脱世ずも
自己の名を捨て。序主の迷ひを解く事
と要とす。是や雅什之義の。破戒を厭はず
して。英名を世に流布し。廣く序主を掩支
せしこと斗らず。蒲萄の潤ふ程ぞ幽の
若を堺に顕しらんと。盛事の終りの逸を
是にわし。白鼻毛を筆に纏ふて。蛍雪を
炎(ポ)瞎(ヤン)。南蛮に向ひ。憫れ梓がしらに記す。
序する事志道軒

志道軒評論雑芸誌

山里にさびしき寂(さび)しきまぼろしのうへにかぜよる紀は志道軒にに
影を見せし和文金銀又は書紙袋(ホトコ)し強ひて抜萃して極楽(ごくらく)し
蒼(そう)情(じやう)紙鳶(えん)しるし後家が癖(くせ)すましばり見るに寄びがる紅一處を
いかれよかぐる見捨て気がつくよまく雑芸しけるを豪毛(えで)ある
みる光ッをを覚悟(ほうまう)で評論するに志道軒が自序をば見まじば金論
自然と推量し作る文章(さうらく)の秋水が跡(ぞう)を見まじば頭(こうべ)を束ね
一奇(き)人あり平気にて名を闕くく笑ふに恨らくハいよいよこれを
面ごく見とく笑ず此友人風来子是が傍化て書きあらる
との筆勢にく一名天竺浪人が自作として見へ侍らば
さもまじかまじが自序の縁(ぶうき)来り紙鳶(しえん)堂(どう)主風来山人

一名天竺浪人浮世三名又重宝居士寓居〻書に学び詩を能ば
紙朱子余人ふまあらば板ふは翻譯板ありそれ評判
彩〻すぐれ他は博識高才たん綱素とそひ自分ふ自分の
作を書めを能ば讃英人初めどあれば自讃は悼ひ又
謙遜のこふくそこを行狀德業ひらを能ぐ〻かぐ〻
他人を書記をふこの西人それ〻他人ふ稿〻書作すを書なをんう又自分ふ作を書てを
撰者他人すれば自讃の稿ふ〻ば和水が跋を惜むらく
多く友人紙朱子を作作りてとふを友人行某是が作を撰ぐ
少を書作ば他を擬稿ふ〻ばらかくのごとく又人〻乃
志を形ぐ自作少を治をすが富士よりもこを名高きハ

誠ふ西ハけの親をとうん亦又壹を)たけぎやつと云うれ西
ハければ今彼が作を書紙著安市冊ふ作〻で又何ぞや或
多を紙書〻是を画とる於雲体を多あを)ば棒ふちり
で先ん少を〻ふ西羅坊ひう英は書を反〻志りぐ〻し
く後をのひ〻ばそれこう夫於西ハけふあ〻ぐやすぐ書
作るふ〻志ぐし他人の今彼が作又書紙書なし〻る稿ふ凡
少家雷〻くひを)ども自序ふ〻稿ふ願〻しなる西〻自讃を海
慶の稿どを我語ふ秦始皇二世乃時趙高と云るだ〻をのご
庶を作して馬少を〻ひそ先ハけ馬庶の名目一るぐ〻を〻ふ〻
又ひ於異名紙挙〻賜紙洛又名をを〻自他をを〻に注ずる前
夫乃西ハけふ書なし〻ハ海光寿と彼と日本う

二人の名物なりし然バ是紙にて彼が生質紙寃すなはに無智辯
聴ふして又ことかく安本冊を釈すと序に書くゐをふくめかくば
されバ彼雑岐残口が書し艶道通鑑曲三絃なぐひふりくそれよ
りまで文の詞ち也野鄙なるやい見へ侍るなれども侍れ一部
始終を見るにおもしろきまた書とがらに素白に合こる涼けもの涼
書法ら称し寓言ハ方大和荘子ごとも此の為しこそいひし詞の花多
志賀の宮を鮮其中に何を種とせん浮草乃浪のうきしとも志がの
たるごとき云種の根なしかきる紙ぢなかくしい侍るなどこれ涼
み甚又女の夫婦一所に浅草の観音へ二七日乃通夜籠りせしに
初まりけるに満する夜の暁南の方より垂女の松茸持乃中へ
飛入ると見て懐胎し男子出生す し ハ男は志道軒の母

無恨のあまり浅草観音に祈りし子なれバここぞ浅草
小き鶉塚よ稚よりいの我かし浮きをせぬ云菩薩に祈しより咲
くるる風来仙人が仙境に至るく夢中にかいり見へ羽扇を与へて
日汝天地の男を理尽し流通乃人情を知べし其人情乃至要ハ
父慈を身一ツにすまさバ諸国を文里すんども極初あべしるすと
教へしとて又くだけきすきなりまいの気ハ重く堪てやかし
まして出家は志紙止へ得るのまずのハ道理なりさそなるんと
丈よるまなやさん夜去る強おぶかいがてんきや二丁余楽でおき是所名も
吉原の極星流の源より紫冠の男女が後紙手堀町神に云かるも焼
町えるか紙いの新神明や湯島深川までくえなし彼是紛指広武蔵野まで
極星甲乙張なくいふなく名さへ極夜鷹の花なりしく女郎もしくかずなり

仆ずまく上洛花の都うゑふあふ清水の名うかりたまへ天久
神のけく祇園清水流て行や文川うの磯絶ゑや契絶ゑ想嫁君
むま）花二條川京や松原ま（く松く多よ久里ふいく西伏見乃
ちりくちうたいくめぐる新波ぐ京よりかつ口ぐ流ぐ紙ぐ彩ぐく
らしく紅をちる新町や祇園ん婦うを西里て傾城野郎の行ぐ河ま
むらみまいうに祝まんだうまぐくくまハう三ツの津ま弱る毎
なき月うあくだし祇園ふ京ぐ別乃拍子ぐちあ紀のうきも
ちぐ此ぬ祇園ぐ京ぐ所の人さ（も京ぐくハ見ぐちぬ逝きう
ぐ祇ぬが（ぎぐ）里ま生）ぬ為恵まぐ京よ出ぐ行ぐ京より紀ふなぐ
く柳町博多浦うふ玉行くふ彩波りちぐ菜屋の一間ふ座を
らいかり彩ぐ行ぐ彩で伏い見長ぐ肩ふ長行ぐり見次ふ祇園乃

遠写ろう長ぐ猿猴のぐと紀長紙ぐ入く祇園を奪ぐ祝らん
ぐすると彼の波遠徳茨鬼者ぐ子ぐたくく長き眼紙切ぐ例をありひ出ぐ
さうぐ京えふく長ぐ明徳切ぐうぐ少ん見長ぐまりうぐ大雑ぐをんく圍ま
生捕ぬちんと押寄ぐたる長き竿乃ぐ紀見紙祇園ふくなぐまハセ
バ皆乃墓ぐ京ぐふ京ま）化の人ハ起さう彩バ京ぐから起るるかふハぐ
遁遁谷行る長さぐ又祇園をりく作紀ぐ救いなんけくまかく
穿鑿玉玉ぐ祇園乃度ぐ京ぐ長き意賀ふ京ぐみぐ紀ぐうぐすみて
祝ふ者女ぐんぐ袈裟ぬ乃ぐ京ぐ常徳解く鶴ふ穴ぐ紀を
見ぐくうく鳥ぐ京ぐ新ぐうぐ弱ぐきぐのぐら男ふ疫ぐ紀ぐ岸鶴者
ぐく船ぐ志めら祇ぐ家長ぐ下ぐ新ぐくく地祇ぐ）ぐんぐ流ぐふぐ家ぐ乃ぐこ
ぐちまぐ行ぐ波祇ぐ祝乃ぐ妙ぐのぐと頭ぐ文ぐ家ぐ労（行ぐ）バ保ぐ長の

なを先の解説をうけて人参湯雑五位吟ふる事二月ごろ又兵衛佐
より寛克乃部とて秘ふ藤内重家作り物しく事外に
出のふ詩紙えらく人参乃雑あるかく陳勢ちかぢか落く笑人
ゆうちを思い清き市廛へ歩んと志し扇ふ打ふる
るをいらば笑色粧ふかけ出し清新なる乾隆帝
乃住給ふ北京ふるん玉り扇ちう新うあを濃城中
深く入迷れどもを新又人弱ば詩処ゆるをのを机く志に
すいるまふ事を紀ちをを机く後宮う忍び入しを
紙書天皇ふく龍撥大士おぐ凡夫たうし時術行を以詩
ひ帝城の後宮へ濃多乃秘術をもく入数多は官女紙犯し
まつる例を云をや掃ら矢行ん乃ふる新机くまをねばきて

ひ遠まつう撥の志仰する烏羽乃数を日につひぐく楽寛
後乃かるう み詩来る火多ふ燒身衣裳紙ぬぐ命ふを賛へ
ぐ紀扇を有る元ともなくせみの脱がら燒くそ主命ふぐ
赤裸う那まおそうるむ事の玉の結を剥うん少をせ〜愛う
帝王に仕ふや思い乃ふなる勅問ふを廣宮の又兵ふ燒る
山をあらじ中の詩へ滿を淡ふ悦の眉ぐ〜き勅答を
しく〜ふる八家雲乃不二山を中帝に書ふ絶る机くやれば
仙宮ふ事紙見てを白扇ばう〜ましかるを詩ふを作り中
くふ〜ふむをのをを少をのうり乃里不二乃白雪くうんどく〜の
ふを詩紙をを人穴紙出くこを世界を涼〜うし宮乃雪八
椿う〜ふく白涼をかへつて旨ぐ〜に又兵ふ詩ぐをまくる

第五段に云ふも不足なりとて、ちゝゝく愛いたく紙免れば帝
清盛不納さらば汝紙を作りこしらへ富士山紙築山うせんこゝろ
ば長り来りしがそゝ本所泳ぎ見くまくさ者ひいるかなど云ふ
むうなき）こゝハ後代にて乃孤摩なまなきばごくもに不二山乃雛形紙作り
ふ一先帰新せんとゝ云ハ宰相筋ふうるそゝかぶうふつくちゝ乃
くるぬ秦始皇時分徐福ゝ云る山師が蓬莱山（不死の薬紙を
形日本熊野山を尋ん止りゝく弱ふ悔ゝ地例を引くく難題なば
さ是）どゝを浅ゝ進ハ徐福ふ勝るこゝ中の無長紙作てするが来
不二乃大山師西ちゝ第ふくく稽かすを意風やかの庭度乃
夕雲ふ通ひ中ゝ後度仲蓬ゝを花代ゝ西貴目乃代りふ
泊ゝゝこの八角だうゝ西貴目のふゝれ　でハ不二乃山を

そゝぬきふなるゝ近松ゝひゝ始ゝを思ひあゝゝひゝ
ゝ弱ふ帝ゝ宰相ゝふくく長き髭ゝ流ゝ
だうゝ乃たうさを）こゝ往ふくく用意出来ぬ）ハ数方乃紙ふ
四面余別の紙ゝ糊ゝ張外師ゝを集うちの考出紙
作るゝ洋中ゝふゝゝ不二山紙張接ふくく居去へ
成ゝくハ日本の船摩るを）ハ祐神元儀判のう（風の神ゝ
ゝかゝひふくく悪紙ゝ吹ちゝひ弱ハ数方ゝ長紙
一時ゝ孤紙ゝ四余別の糊と紙濕ゝ濕ゝ
ゝ中ふ漂ゝ唐人ゝふゝ人のゝ地ゝなりゝくゝ
かゝゝゝ紙ゝ不思議ゝゝゝ神ゝうゝ考出ゝゝる志河ゝ
濕ゝゝゝ孤一渡ゝかゝ難ゝくゝ強ゝ会ゝ唐人

百姓り心ことに女護ヶ島へ吹流され又家ふ止りそもそも
大唐新宮道なれば馬康無し傾城揚屋を
仕建女房紙数多引受男の仮婚なれば男帝極男と
名付座りてをうりくなんどいふく数四紙つゝび嬢作り
しゞを後り歌楽極く哀来る理ふく百姓の色所人へ
だんきよかゝ色紙の世へ源氏物語の世へ揚屋へ時代男帝なれば又十紙〻切まく列表勧めれば
いろ〻重文の松茸八再来でくゝ織石なるぬ多るれば領ふく
蝿紙おふやう歳作るあり志を紙来仏人忽然世あゝれば出版ヶ
久慈嬉乳ヶ誠く回汝常〻人の繁久慈ふ上なゝと思ひゆへ
ふゞ通力紙ふく女護ヶ島へ多くて極男をまゝら〻多慈のはぢ

きるく人の金紙そこなふ事を目付ひろうい芝紙志ゐ只宮世志
義へどゝ汝義しゝ志ん〻ぐうかく祐恵をはるまく四七千余
年沈黒雲を絶えういざや汝う志ゐさんこゝ鏡をおくさうむく
色バかの溜汚ヶ水くゝ帝紙黄ふきあゝで月くゝ恢ゝ
溜ゝ進今ゝ〻ゐ黄ゝ思ひ歌紙八千だり紙義
雲ゝかゝゝぐひを関義くゝ色ゝ紙紙ゝ
抜けくゝおのづゝ元法師の姿紙付ゝゝれバ家多ゐゝを付され
ゝそおゝう紙うゝゝ思ゝセバ不思議や虚空ふ吉楽ゆゑ〻ゝ
絲焔ゝかゝゝゝき紫雲ゝゝ家ゝ津る物ひり孤かく溜ゝ進ヶ右
乃ふ出り金沙乃ふ）バ木ふて作りする松茸の歌せゝ抱ふ
ゝゝる二十時仏人志ゝを合汝ヶを白い極るゝて青京法ヶ雑

俄の時清水氏親子多勢ふ立ちふがゆくこと方女護ゞ清ふくく大勢
乃唐人巻二回ふ死ぬとぞ泣き義なりしと渡ふ人親を未氏
松茸と雪ゞ語ひ方ゞ多の新うみ立ひ清恩報ぜん
たゆ見ようとやく市ふ帰り道ふ志と云文字を以志乃
新ふ名紙改淡ふ乃地内ふ名ゆくをどゞ嘲うし人を集ゆ
深の穴といい曲ゞ人紙識む曲ゞ うんど綴ゞ城見ふ家う
芸ゞ芸ゞ当ふ評論ち人彼方去ふ ぐこそさうよしゆふ新うし古来
稀ふ多ハうゞ市ふ帰ふ道ふ志と云ふ字紙に志道新
少ふ更名ふ志ふ志次道ハ行等ふ ぼゞ家ふ立ふ
道ふゞ紙ふ詮ふ ふんふ一且誤ふ出家氏志紙縦令止ふ
こと家早ふ作ふ乃なれハ慚愧懺悔ゞ再び前ふ立かゞりふ

ふも大変ふ乃義道ふ志ゞゞハ顔面喟然うして歎ふ
鑽仰氏道ふふりとも志氏なゞハ志道の文字を執りゞゞ宜ふ
臂紙勢ふ祖父西来意氏結ふ実市朱ふ面目ふ立ふ
ふ仏の道ふ行て志道の二字紙字易ふ更名ふ
ぎも亜聖ふ先ふいるぞや道ふ学ん ふれ仰ゞバ拝ふ鑽バ
尚堅中ふなゞたいふふふふハ立ふ ふ熱き話ふ道紙志氏
ふ道ふ志氏ふ字ふ有ふ名字ハ名ふ ふ者板ふ作ふ外ふ安市冊の
親ふ立ふ有ふ多ふ ふ作ふ中ふ志道の文字ふ軒号
ふゞ作ふハ情ふ毛紙吹ふ自たいの疵ふ ふ
金壁暇森ふゞふ偶然の誤ふ ふ誰ふ ふ
俄ふ上の誤ふ誤ふ義ふ ふ義ふ作ふ侍ふ亡ゞ

節ふ由て徳でゆくハ汝可をあまだば抛て忽ふすぐつき若ハすし残り交
岩草ふそ標ずるよその紙何の無つそなき得がく雜樹し侍るされ
ごとも傑貶がなけまだ自他のくみふするば黙く如きハ園ろく
家ゝ今ハこそ要紙凌ふみかまじきれ乃羽で夜ずし次らす引挙志
無ごそふくも重根より実をかむしかば恋とき寓言紙めく
婚免全く父の松茸まづ生れ濫觴もまで大さく父好さる情り
よき孫ふあまれ此雲茸の身勢りふ發岩して發潔で
萎し天降まで本の松茸紙太の身に交握て文法草木
地円ふこ海り茸葛の内ふ坐し重父の松茸ふて本の松茸
たりく姫末紙かよ浪免へ殊ず寓言乃姉で頃筆吉なれ
自立かる事吾妻此名物法師すりがく深たる家ま作りく宴の

すき志とハよろこあゝ被乃浪かきりそけるく藻塩草寄るも見れ
バ彼乱来仙人老翁化ふく流るゝを今よりお家と止るし志るれたり
只草木ゞ芸ゟ将果んハ本ゝ意かゝぐる家ま先生家ふ業こ
すべき道紙舞よと家れし伸りし仙人羽扇紙何ぞふく白髪哉く
汝能家言で伝ぶとと家の紙上と汝が生涯紙示さん哉ハこそ翁
元暦年中此当所ふしく源平乃戦ひあんどきぞ雅んの耳ふ残る
渊天下治るく通余り軍路でなきらかし諸人太平の化をこのしむ泰ハ
行四合ふ長きりさるがゆくぐ思ひめぐらすしいざる祖先ごくの剣さ
提洋翁四百年ば基紙云し頼相将出き種あらんやとを林是なれ
陳游が祖なり今諸悲ば大小名で見るに牧乱義強乃獲尾ふ流
いこふ匠史よきりして家紙盛に其の少りくば家も治世ふ首たりせば

劔戟を怒んハ天ふさふの罪なりがんどく書〳〵を上朱深き
なる好みを離さぬを實のりく熟とれば花と開（ゆる）こと決て
能くバ藝術なく家を怒さんをもふ志ハなれども世の俗人の藝
を称する業の湯とも絶ふ志ハけ更〳〵技藝志とぐ自殺
を殺ヤツハアテレックスツテンくうんと皆破件ずく〳〵ゆこを中ふ
磐うの雜芸をもこゝを見て（ゆき）ハ寂て
とく見捨ぬされども天下狂悖ばるゝこゝを見て（ゆき）ハ寂て
刻多ハ志ふすく〳〵巧言令色辯ふたと雷人を誠免弱ふ
ふ紙ふこゝるハ及バ沙ふく慎むべきゝるふん作る。亦次てかくの
ゆく被〳〵ふ志く曰草竟信の藝とふを皆小四の戯なり
只人を学ぶべきハ学問ゆと書画ふのふ出ぬ見さ（者）

何ゝを好を近儒学竟ごく上下巻つゝ丹ゝ紙さら（火打
袋で耳諸を焼）ハ及ばゝ志バらまてく家ゞ多ゞ家ゞ自
出ひるゝゝぬ具ゝ八重千見るごく宮角八面ふ喰志ごゝても
ふい多ゝ恵ハ出ざれバ布く世男ゝ法布ふを布ゝれゝ見紙
名牙て腐儒をいひ屁ゝ儒布ゝを見ふ生）バ味学のを
くさ紙ゝ学ゝ布ゝ学ゝ布ゝくゝ学ゝ布ゝくゝきハさんゝ〳〵ゝのゝりゝこく
又見ゝを見被ゝゝる出ゝきゝゝ宋儒の部中氣をゝゝる（出ゝ）
草見ゝを角ゝを恵さんとゝく半ゝを穀ゝを来流の本の業儒布
ふゝを精牙ふ家ゝく宗ゝゝ見ゝを欣ゝ二伝ふ布ゝを紙家ゝん
ゞゝ書ゝゝるハ尤人ふゝ丹ゝ被ゝゝ志ゝらゝゝでハ中ゝく安ゝ冊の親ゝを
八着板ハ偽りかと感ゝ学ふ憶ゝり。尚次ゝ来ゝ丹ゝまゝふ立てゝを

又宋儒うまど蔑しく是皆中庸紙知らざると黒色をぬ
うざ法よりも悪しり多ハけすり唐ハ唐日本ハ日出前ハ
前今ハ今すりこ代出ぬ雅楽同じ必ず三く拱する
が徳をうこく今世人のおふく三年もせばすんぐと。次
ふ又平家乃要逆逆討して種兼羽軍北代ふ一流治く后大小
名ぬ乱く白河院乱紙事とし狂言綺語の戯イヨ市川の
敵孫とお先くも）おもぬつ百うしく和くふ誤て福面復の
右ふあくざも）バ左ふ逆牙すふく玉ハ拾式ふく大阪の拾里
すぐくふつふも世ハも）ぬ席北威を偽る宝級牙で狐狸が
若さも）バ左すぐ上下北ひうを凡人どく難評し吏
かくく又ちんぷんうん乃屁をぷつくを知りの茶で周の外でかり

切く波さんぶバ書物却て重人紙恨べく誰やらが割札の多きを
凡て恵乃治らざるをもうハつまく云ぐおとく乱く塩う
教ハ出来高ふく后ふ匡業ハり面北乱俗ハ日本ニ遠ふ
く天子が波乃者を同邪ふく寸ふ入孫バ夜者く天下ハ
一人の天下ふ行ぐ天下北天下すくと百ら波ひ紙ひち
らくを乱天下紙ぬたくる不坊西方なる玉あ聖人岩
出波ふ日本ふ月光ふ仏義をもる玉あふ聖人出ぬ
くを太平紙すふ后ハ文化ふ寸ふ玉で鞭鞭う
せく免らも）四石余別紙鬱栗坊すふ必てもこづうら大清の
人と元く巣を移ぬつく振る移ふ大鏡ぬけの百くぬ古く
日本ふを前よも清盛こうる時ぬ悪人ふてを天子う

ぬふとハ思ひ給ひ日本ぐ天子紙醫師ふ成ると云ふ事ハ
天の童子と成ばなるべく成ぬ童子に成と云ふ事ハ忠義の心ざし
なり支那ふ天子ハ天子なるとの八世界の中ふ雙ぶなし
唐の法ハ皆ひとしなべ法ハ唐ふ倣ひて教ハ孔ハ
又知らず書あるもどうぞ考ハ程の者ハ的確の論ふ成ぬ
經濟の学問ハ風俗と同一足ざるを補ひ志ハ知て成ぬ
陸ひ書ふ夜ハ柱ふ倚て卵子紙ハ白く字ハ本と志ハ
白色の出人生達畑ぐ紙ふ絵を習ふ稽古ハ書紙ハ白く
紙絵ハ白くふ後書き事なり志ハ信ふ行ざれバ志ハ紙ハ
白ぐふ童人の教を志ハ童人ハ志道紙ハ出ハ撰ぶ
ハ婦人どもを白く去俵入をするぶとしも分ぬ世の中ふ

管の孔ふ天のぞき火吹竹で初鶴紙襖ふ偏見を説
出し影ハ方を著薪ハ穀籬ふ成やうに尻の方ふ二三寸穴
成かうく鶴ハ鶴鶴風ふ墨入のをけ西でをかふるものと
自負する学ふ世ふ多し童人の教ハ学ふ成ぬ
さ事ハ屁ぷり傳ふの如ハ成ぬハ人を海ふ入る多しすて
ふ行ふ成ふ成ぬ成ぬ大ふ書ふ成ぬ人ど書ふ孫
しも流ふ風来仙人ハ蓮蔵かくふ成ぬ成ぬ
歳云ふれども思ふより出ふ成ぬ成ぬふ出ふ成ぬ止さ
世界の婦ふ成ぬ成ぬ上ふ成ぬ猫ふ鼠ふ成ぬ
成ぬ成ぬ裏後ふ成ぬ動ふ成ぬ成ぬ成ぬ成ぬ成ぬ
紙説出ハ例のおぢけ成ぬ成ぬ唐大和

八風俤を判譚せしこと花をも穿ち作る花雲和歌しこの
いと理なきこと紀貫之くらさるまじ）ば誰が見聞してを奉く
服膺すべし　尚又俤法師業の道をも学び作るうしろく
業の方法和歌三ヶ条人作る俤生得感情優艶する
る八撥剌かい出ず（りれば理なら一方ふく心乱神の論ふも
及ひがたく和歌（作るさま）どをも詭譎神ふをも又夷田文ふを
作るべし雑風俤うま）バそれふ習ひしく俤業をふ志を
先法ふ仏会段稚きに抱ひてひびきたること
ひくしく紀和文の俤を見てく称賞し作る

雅楽意形

かくてうういハ少うう大脚層をかまさ名薬ごうさりうく

俤のもど発自序の末うに書ちるし作る文うう

八十四　志道形

思ふ志をあうまうまう形象多さ此弱の世ふつかれく
志しうを作る世ふをおりひおかいさう此弱ふ色恨ゆすか
志道形もど発出家紙志しうく又俤麿ふかうり作る
時うう少ちうう文ふ
のうまうんと思ひう道のうう作れハをの深世ふ又俤出自
志を紙又雅楽意形道文ふし作る
又俤八深世ふかつる月うらハかをとらかうん道ひまうふか
悪の末大尾う志を形よ発作う

うんぬんと大坂にて[illegible]ふうらをさえんとする者世れ多
[illegible]又[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]二[illegible]
八十のまうをうるゑ[illegible]乃大[illegible]ゑ[illegible]
[illegible]坊[illegible]高[illegible]や松[illegible]乃[illegible]
[illegible]津乃[illegible]
[illegible]ば[illegible]
[illegible]ば[illegible]
[illegible]一七紙左八紙右小[illegible]
[illegible]仙人[illegible]
[illegible]花人[illegible]父母佛法[illegible]

[illegible]する人金を泥中へ抛ぎ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]れ佛法[illegible]滅を教人[illegible]地獄極楽[illegible]
[illegible]ど名を[illegible]悪[illegible]智の[illegible]方便[illegible]
人を導くぞ[illegible]人は法陽の二つ[illegible]
[illegible]ば石と金[illegible]
乃薪の[illegible]人の一生[illegible]
[illegible]消る火地獄へ行や極楽へ行や海洲[illegible]
[illegible]ば地獄極楽[illegible]
悟て曰[illegible]乃[illegible]
[illegible]
吾洲一[illegible]見[illegible]彼[illegible]
[illegible]言て曰志道軒元来博識

乃禅僧なりよりて僧(ゆ)ゆ作る狂ふに宿習ふかや仏法をつくる人彼
いうる雲孤ふ云れく還俗ちうや世故ふ凡夫仏人といふる京
教人をさ〜らく(ろま)ゞ雲誠の風〜ゆ書ふ世ふをゆむ世のくく
ちさとに迷ひ作らんうと思ふよりも要を振く一切ものゞ園
長を加へく雑芸作るされども彼えりの僧ゆらばいろま)
ゞ俗世のゆくちるれば光明院ゞやらゞ必ふ世ふ作家のそとふ
く仏教をゆゞ〜うんゞく書ゞうき器ハなけまゞも元朱刹繁深衣
麿ゞ乃ふ家るゆを隨落ち作ふ遠ひなければ頭ゆ僧作ふを
書ゆゆゞ学ゞ作く還俗を紙絵〜思ふ出ふの志
ゆ〜ゆゞふて中ゞ〜刹繁ゆ深の衣ふを〜ぬるま)ハ学を
編幅作ゞふゞ〜まゆ俳ゆるゞのやらに強く仏道を彼作を

えせざま)ハ乃のゞ〜ふをなるゞ(ゆ)ゆるれども作り〜ゆの作ふ写本の
後産雑話ゆ云ふゆ書ふ和又抱を線方より作り一境〜
作ふ作産後の産ふ作作ふ別浪人なるゆ鳩巣ゆ云ふ腐僧の
雑話ゆ作ふを室新帥ゆふ人の撰びと乃人なるゞ作雑話ふを作ふ家西流
乃之祖法然上人の一枚起請を引く地獄極楽ハ仏の方便説ふく根ゆ
ゆきゆるなり起ゞく仏法を学を有ゆいひ智を安ゆいふえんゞく彼作〜
ゆきゆの雑話のゆるま)ハ作ふに作きゆの業僧ゆの僻ゞ〜て京く仏
法を蔑ゆ〜なるゆ乃人(作ま)ハ見ゆ〜ゆゞ〜思ふん人〜乃世紙
救んゞく発菩薩彼ゆん世ゆ思ふ人〜ゆ作ふハ喜〜く不
彼文多々れハ中〜容易ゆを書光〜ゞく宗服を作〜ゆ作ふ
志道彩ゞ作の一部を見く光ッ大敵乃後産雑話僧歌筆陣社家深ふ

志を形が作の一條を小乗と対せんとて円と三乗とを嘉の
矢合せて免作る所謂○佛法も寂滅を敬へとそうすれば
元来の虚空寂寞を為とかく道徳の至極とするふもうら
ば家が佛法も心をかく道とするゆへ祇佛ハ皆仏より解脱
志強くるをいふ也別寂滅なり又涅槃と寂滅をいふ
佛の無餘涅槃も不生不滅なりされば法花経ふ常在此不滅と
も常在霊鷲山とも説き法ふ心ハ清浄なるを無垢と名
付るなり法ハ保道より異端の虚空寂滅の教へを高きなる
大学ふるとれども忘れを文と教へうえで宋儒朱子ゆへとの
敬するも虚空寂寞なるの異端の説と同るの物ふ敬するハ
佛法の真味をもつぶ中く吸ふくるるを成ぐてさが為り

○法ふ地獄極楽うんど名を分く異端空智の妖媚を教へる
方便ふくく智ひるを導くぐ為き教へふもなくぐるん書
作るハ祇元出家なるゆへ保佛ものの為に流ふうち法ける
地獄極楽ハ為きるとハえいるとも孫ぐ異端空智の妖媚をだ
ちとうを方便の業へもぐくいるハなくいうんるをれと
いうを孫ぐもぐうふも命ぐなる言便なりを所以いうん空
為き)ハ佛法の方便を世俗ふいるるとなきるかを)ぐを妖媚を
導く方便ふくく俗りいふ俗ふ孫ぐもぐ便
知ぐきやうふあるふや吾が佛道の方便ぐいるハ一種の釈ふ
孫ぐ方ハ法便を用ふく法用ぐいふ意なり又法義理
乃ふ説き孫ふ祇教ハ大小乗帯権方便説とふと

法華の圓實の教ふ著しく示すの教とすべく權教の方
便說といふなり法華經ふかやと方便品あまたでも皆假說權
方便ふかやかく次圓實なりさされば已說華嚴兼別教故帶
權四教而法華方便但本門意遂本居初者思惟未
說根本法花也是則華嚴法華前方便意あり其
所まば方便のみ多くなる事なるべふ偽りすべ
虛誕なるべし說きそ說くべふくはるべきを知べし佛の方便
皆實說なるべし必禁ふべ佛の一切所生
妄語と戒免語ふ佛ものとしく曉嬾と業まん者ふ仮
偽りく實ふなるべき極樂地獄をかりと說き教へ強ん
や長常九人のうへふくも說ふ畠山重忠のごとくふ勇力
武士かれど正直ふしく一生偽りをいとべと或書ふそ見へ
給るかして次や佛菩薩ふ如來ふく假初ふ
虛誕なる說をるべ真語正語如々不動ふしく異なる雜語ハ
色頭なしかれば如佛のくとしく誑惑ふ強ふる変しく
ふ生ふ如ふ法華經方便品ふ云諸佛如來の言辭
安ななりと說をられるべ是等をよくく深究しくかる
安女冊や本經佛ちうどが地獄極樂を說しくんて偽り
しるそのもるべまば方便の教へふしく實ハなきるべ
ばいるべを見國せ後人くかからば誑されて惑のるれ
只人も信公城ものふしくかしも紫ふんを紀ざるして禪儒佛
ものこ教ふかるふ教しく佛教を方便偽說やるべく公得

たゞふく意識を智識(ふし)多智ひるくんを導くべきなり教ふる
あるべしといふや何ぞ佛ふおのく親疎貴賤長幼隔りなきさや
法界平等心とりく元生成濟度志願ふり汝ちらども法義強ふる今此
三界皆是我有其中衆生悉是吾子ぞを説き給へり且因覺極
ふ曰地獄天宮為淨土有性無性齊成佛道説き給ふる理佛性なる
ふりく官家ふ是紙判秋しく云下草一木皆ひく一因果なる也)バ出河
大地同一佛性ふりく草木皆成佛するとるんがくのおとき
乃教説を志道ひとりく悟識の沙門なる)バ絶ずぐ志りぼるんかこが
還俗乃悲を蘊藏ちんがた給へ凡夫仙人と号ふ根なる人を仏く
原を忘佛法を破しあるる義ぬする破しあるるぬ大罪人獅子身
中乃虫なるべく○次ふ曰人ハ法湯の二ッを仏く狂城なる孩云バ

石と金とを合ふ仏を出ずるがおとし火の薪ひる間ハ
人の一生のおとし火消る時ふ弱る石乃炭ハ骨死髏と
ぞ云ふる人を法湯の二ッを仏く狂城なる孩云ふ
を神とるく狂城孩とふくいふるふ仏ふ大ひるあふしく
孩ふくいかるをいるもを凡てをれバ因りを部汲を書ふり
仏る光ッ神道佛道ふを云に三世ふ且ざふ必人六道輪廻因果の道理を
辨きるにより天地法湯ふるを考るふ説どを委しかるべ故ふ
佛家乃教義ふく説ふ為ふ天地法湯のるを示佛佛法義
ふを云に沙法ふるふなり是を委しくいるべ天地乃号ふ一ッの理ふ
物ひり法理感招し動く氣少いふ物ふ変じを変ずるを
いふを孩云バ物ふ乱ぶ生りて色ぶを変ずるとなり狂水と波ふ

ごとく、五穀ハ活と成、氣一度うごくに一度ハ動ずるなり、これを動
紙法身といふなり、動ずるを又動と湯といふなり、此法湯が又ッて
ひとしく本火と重水乃又行となる、此又行が和合しゝく人となる、
多獸多本多の物と成なり、是をわること多く万物といふなり、
かくのごとく暴惡悪ふ復ふしゝく儒道ゆるぶといふものなり、乾坤佛
道ふゝく要しゝいふ時を此又行と地水火風と乃又大が假ふ聚ふ、
人ハ又聚と成能するなり、此又大ふ根識ハ二ッが胎中十月乃男ふ女
ゝく具足するなり、是紙七大と云なり、中ごろ出生ゝく、此地水火風
空六根六識乃七大前成一切なり、されば大乗經乃説紙見られに最初
中陰の時父母の處ゝおゝく貪愛して紙を生ずゝ愛乃因緣ゝ
依て地水火風の四大和合すると所謂精血の二滴合しゝく一滴となるを

大さ豆子乃ごとくゝ紙梵語ゝ歌羅羅といふ此義々に三ッ乃訣なり、
命根煖ハ三ッ乃初め歌羅々乃時氣息を入するに二種の道筋なり前道
母乃氣息ふ随ゝく上下次此息の出るを名付ゝく身命と云ゝく、
是を紙道といふ又不具不燥なるを煙といふ中乃心意紙名付て
識といふ此識が託胎後生乃意識なり是別乃去ゝ業煩惱乃
因ふ依ゝく今生乃善惡の果報紙又ゝ最初の心なり兄より十月を
強ゝく出生するに此宿胎乃中始男子ハ母ゝ愛を起し女子ハ父が
愛紙起をなりがゝくのごとくゝ愛乃起なり紙ゝいまだ色身のなら
ぬを識といふ兄ゝ出生する中ごろを種ゝと位乃訣
ゝ成なれども未だ都ゝ炎しゝいまだ粗省四大次がゝ地水
火風空根識の七大前成ゝおのづゝ法湯ハおのゝ備てなり、

命くふ間も天地なり天も陽ふして輕くすみて上ふるもくに男なり、
地も陰ふして濁下ふるもくに女なり天地陰陽自然の理
なるまさこの世界の火燃入 孫云的成ずるとせばるる状も未ふるくふ
ばら薪炭の孫云ものは彼仰ふ曰入涅槃如薪盡火滅少
ものもと貸り用いたるる是ハ衆生ハ流ふ流生の化意惡ふく
弥勤菩ハ出世成道すぐの二佛ハ中間を地藏菩ハ渇世者
流生化意以附屬志張ひうあ入涅槃志張ふるもで孫云て薪
盡火滅ふるもどぶふるもの如く衆佛世界を孫云ふるもく人も
命強のるふ孫云ふるもいぐく分喩とふるく的當の孫云ハ
ぜ流ふく孫云を竹くふもとハ羅ぐくいわどきふくふるもで筒古
ふ悪なるもの領解するくふ謗孫云ふるもの見笠の

るる解云以用いぜ少ふ赤是以いぐすぐく人身のもうすき衆の心強さ
ほくきふくおふ云地水火風空の五大地ハ地ふ水ハ水
ふ風ふ空ハ虛空ふ五大ものく還去ふく火大のこ弥生ふ火ハ
人の鼻ぶ當家なふさんバ呼吸の息盡てを火大ふ煖氣なるふハ
炭火で消ふてを暫く火ふ弥生張ふくなるぶ出ぐふ
氣風の孫ふぐふくふ号ふりそもの火となるふくを息絶ても
報者ハ生ぶ(ぶき)バ薪ふするもふ古人ふ写ふくなるもふくされバ息絶てを二十
四ふ力強煖氣ハ去ふふ出ぐふふハ少ふも動揺するもなれ
ば煖ふ胸ふ出ふ息ハ裏ふくふ治ふふふ出ぐふくふ八苦
ハ意中一度ふものぶ(極楽ハ行や)ぐふ出ふハ時の小免ふそなふふふ○次ふ寺
消ふる火地獄(行や汝ハ行)ふ和で知ふくバ地獄極楽ふふすぐふと

法に迷ひ紙抑く大か悟て曰先生教（と文く是すぐ乃ち悪い鬱
と一面義乃先毎ゆるがおとと〻今より出家と止む〻
世俗の一般いきく形法者見識元神の道いえたく是故ふ者
悪う難義とと〻〻先の風来の他人が経問を懸願〻がて歌ふ
消くる火が地獄（走極楽（もたく他（を行ぐき拾ハる〻
さく法は行者で知く〻バ地獄極楽みるすぐ〻こを理
玉掛かる問〻より是を消くる火の行ゆうれバ地獄極楽ハ
なきるのか〻いを絵ごとれと完理く法く進拍掌ちく省悟
〻出家ち志と止先義偽ちるれ紙ゆ見る人〻ちきこのよ紀
やうふ書なり〻ゆるゆうく〻てきよ家を経彼〻判譚
ちるに市仏人平信で〻く問ふ〻ちるバ教ふ火を消（白戻

者ちとき犯戒でうう法く有に行拾ぐ地獄（行や極楽（
行や法は行法を志〻バ地獄極楽みるすぐ〻と経問
せば吾法を且ふ代く学を言く曰昇火消（玉の徒
後く果く假りの躯でうう法〻有地獄道極楽津
ちふを渇らば餓鬼畜生（畜生ち）脩羅（羅）人道天道（も
現世化業の善悪報ちるく法く拾ハ人〻帰ちるふ
具〻くのる一心が法くなり法を唯一神道でハ神少
〻い儒道でハ性と〻ちく〻法ちのふく善の名を称う
ちるく善〻〻〻経法者ハ仏教乃法獲ふく行ま〻バ
我国をかハま〻ども我仏道乃肝要〻る一心ハりを礼た
ち解〻する者ハ者異ちるり儒ハ今世でうう説い〻面

る去来共に二世ふたを直に唱へ神道の極をとて高間
ご原の神主とやとご寛なり是ハ仏方ふて
仏教をするの少ハ家ふたを省ぶ悪く神儒等
心誠のもを委しく雑ぜ学ばれども神道てハ地獄道のも
祝根の玉をいのく家廟を祭ん神を拝を祭くの
かんぐらの神託祝ふるに学ぶ志ぶ物うるもとして
根の玉を入ぶるるもとを又いく人らうちは
うく毎ばよりて物のをもかるべ毎のみ出るの
いうけく根の玉ふ者しむうんをの祭りかく仏神
をふ地獄道をなるの祝部人祭ふを志道行いぞう
断善の形ぬを教し同業を撰ぶ地獄極楽を

ものやうみ書なし様ふちりを見ぬ仏を見む人々祝謝恩を
ほるのさをかざうを地獄極楽ふるるを行ぶをバいんが
ぬ家ふを止の遊伝をるや寝ふ汝を道新ふをからぐ
外道新をいい伝ぶ者をふを祖いりぶ者をハ
博識の祥伝なるより少ハ仏家の外法のるハ大をふを
領解をつくむなを)どををのを遊伝の祝を浮養せんをい
すげるるの不儀の玉をさを)祝腐儒ハ屁ぶり儒をうを悪
にいいぶを)どをを和をを腐儒をの仏法を閻底祝をら
だをを亡目打ふうをりハ道学を汝を他すを去るを知ぬ
新を仏道を義水するを答を基市を者を又悪い鑿廷
ごを学の学をを去るを化ふを其切德唐天竺)ハ因縁

なく、西宗異成ぐ、出家仏止免還俗ちるや、宗ふ和ても、
仏、そ、弱俗るれば、三十棒を切ぐ、まきそのなり、宗ふ仏ぐ身の
う（行末の世仏推量ひるに、弦ー一切衆生を吾子ぢぐ、救い弱
ん）と思ひ次、慈悲心帰佛さ、八難のそのを度ぐ、少の弱ふ、
仏を八難ひ随一のく、初めふも、そい為、ぢく世智辯聰信邪
倒見不信三宝肆意輕悔此身数已侵在三塗随業沉没久乃
得出貶在人道還不正信家生徒生一世長増長邪見具造
衆罪尋爾後此文の言ひ的当ー作ひ、痛いふ悲ひ
耐ひ、さま）バ神儒の二教ふ要ー、辯知ざる死ひそ死ぬ不出
不滅乃心法のひ仏ぢ物ぬ、ぢ、ー、さひてはふ雑ぢ、ひる六道
ひ往来輪廻するひ、ぢ、ぢ治ぢ、ぢ、ん有ひ生ッ佛道ふく、

心法ふ屬する物ハ性氣識情なり儒道ではハ性と喚ん佛道ではハ心性
ぢ連綿ーしこるふ情の字を儒ではハ情ぢ佛家ではハ情とふ
氣を儒ぐハ多く機の字を用ゆ武ぢ氣機因ーるを軍術
共法ふてハ此機ぢ形要のるなる佛法ふくを機ぢ家
乃戸ふ的るくぢ少いふ物ふ孤気況ーしくひ言を屋宅
出戸ふある樞を形ぐ、ぬ（人ぢ出るに能き而（行を要変況
（行を法ひるぢ仏ひるぢ孤ふ見より合まるく言要の二道
なるちまるり銘ひ乃仏まるを稱り要ふも稱る角人
能バ言訓（屋ーん）を要而（仏ーんも氣次第なりは氣ぢ
意を能方（ぢーた意方ぢーた屋ーひ自中ーるうされバは
氣ぢ守るぬバ行ーさ而（意ぢ行ーは氣ぢ守りぬーあく要変

訓へ曰く孫ハ子宮の内に行なり故ふ気と名づく樞機といふなり、
此気ハ何ぞと云へバ先ツ根本乃元気といふものなり人く臍
を去ること五寸に醫書ふ気海ふくいふく気の源是なり故ふ
此気の行ふぐる事素霊乃説のごとくなり此気右に仰ぐ左に
降ぐ中に血ガ流るゝごとく一寸ばかり先へ運廻なり是を脉と
いふなり是ハ元気ガ絡く動バ別血ハ通てうごかず脉絶
く人死すること是ふ依く人の死ること気を失ふといふなり
此氣を人く生ること臍乃緒といふ物なり此臍の結ること母の
気紙ふ依ふこと多を臍乃下に清止ること是ガ定て仰ぎ
こと血をめぐらし此為いきくなること故ふ此元気を養ハ命根
なり此気ガ所のうち紙なり此気ガ公を家ちく右へ

成とく左へ行ことの為思ふ行こと故ふ此気ガ動て
活道を公ガ家に行こと故ふ行く物を仕事ふ物と行
なり是に論こと紙如くこと故ふ此ハ気ガ動て
支ル公ガ気ふ順へバ悪し気ガ公ふ順へバ気ガ
悪人で家ガうごけバ息ガ強く成ること人の息を家ハ
動くせいなり動るれバ何ぞなれ此ものふ行なりさて
此気ハ引廻る公を左心ふ思ふ要し紙を右ハ廻ガ有こ
此公を家仏道ぐハ第ハ意識ガ有こ
識別識意識紙ハ識といふ此第ハ意識ガ有ハ
行きまはるなり是ハ意ハ識ふ有ハ別乃出来を意といふ
なり紙ハ初めちと赤き物を乃くあるこだなり乃こ

初一念の識なり聲く見るうちに分別が滅じくし法ながき物ハ蹴踊

の根樒乃花をいや法じ猶も左や坐へきまへ去る色を意こふ

なり見るより翁の関をる発くつきも行ま茂因しるゆえ此意なる

南坐しふ身ゟく廻る出来色ふくいきもしいはるもの皆そるま

里たる本色を悩し汚す、そのえ此意の出縁ふ色れてわが

色収汚害、そのなり此意の色を我本心坐こころえるが盗人を

捕てわが子坐るしうるごとくなり是ふようく古称し

わが胸ふむねの志く浪よせくまへバほう淵をたすふ色此まもる

坐るんよえる出縁ゟ、ぼうらもすう元生ハ三惑乃煩悩ふ成仏の種子を

盗てく地獄餓鬼畜生人天見ら六道ゟ流転するゆえ故ふ此煩悩意

故六賊坐いふなりさまへバ銘こわが本心を此意ふおきそとる

これぬやうに覚悟するもの形露なるゆ此意ハ色ふそみ

香りめづるうんども色声香味觸法乃六塵ふおのく

侍し出彩色なり此意識出るゆ縁ふ起るかくばかり故ふ古語

色法非色心やよハ法色かれ色くる意色也彩安那

すんぜよゑるハ六賊の意識まる出縁なりやさまへバ佛家で

無法也色を心生とも真心ともいうりまた儒道ふでも天君

坐いふも心法のあるゆえ故ふ言天君以思為職トあるハ次ふふ

佛道ふていうる第六ハ意識ふしてくまる色乃心主がは法ふ

無中くあくだ儒ふいうる天君の意識ハ佛法でハ妄心

といふ乃也心観坐修するふもそ先ツ此陰妄なる心を所観の境

こしてく観ずるものまりさて神道でハ神霊御霊るんどいへ

まことを佛道とくハ靈魂ゝいふなり、
さればゆゑにいつる氣とゝ物をくゝ人の身内ハ分陰一ッにいふみ
ちゝ貪くハ天地あらくゝ物氣乃あゝぬ物を物意者
未ゝ極をかゝしたがゝ惡業深くゝ迷ゝるものを死てを氣
が殘ゝく靈氣物の身とゝくゝ人の弱ふかゝるゝく得ゝるを
邪怨ゝしゝく宮ゝいるゝものゝさゝあ傳ゝふ事らいゝる性氣別ゝく
台宗ふゝくハ性具法性自性性德性惡ハ法門すんどゝやゝ
說ゝく深ゝゝるゝなれハ宮易ふゝ書ゝるゝがゝ行ゝるゝ
宮ふゝ省略ゝ行ゝるゝ志ゝかゝるゝ心ゝを志ゝ心ゝいふゝものハ靈魂不思議
不可得なゝるゝふゝゝゝ志ゝを見ゝるゝ性ゝ變ゝくゝるゝものゝいふゝ形ゝか
形ゝものゝるゝを何のゝゝを何の形もなゝ形ゝものゝ少ゝ姿もなゝく

行ゝをゝるゝゝゝがゝてゝゝこゝが强ゝゝとゝいふゝゝを仏ゝく法界が我心我
心が法界なゝゝゝ強ゝハ首楞嚴經ふゝを當知虛空生汝心内猶如片
雲點大清裏少御說強ゝくゝ十方諸虛空すゝくゝを我等が心
内ふゝを少ゝゝゝゝゝ雲のゝゝくゝ深ゝくゝふゝを緣なゝゝゝされハ
法華經ゝ妙法ハ唯心なゝゝ支ゝ心法妙ゝいふゝゝ五百法一心
なゝゝ少ゝ花嚴經ふゝを心外無別法ゝゝを說ゝ法ゝゝゝされハゝゝ悟
入ゝふゝを極樂ゝを地獄ゝを仏ゝゝいふゝを極樂ゝを地獄も仏心の分
ゝゝゝ極ふゝくハなゝ赤心内ゝ地獄極樂なゝ少ゝゝゝ台宗ふゝく本
性ハ彌陀唯心の淨土ゝゝゝゝ是なゝゝ形ゝを本業傳ゝゝ天竺震旦人
ゝゝハ孫ゝゝゝゝゝ地獄極樂をゝゝ紙筆ゝ方便の說ゝゝ人ゝ
ゝゝゝゝゝの淨土說を著ふゝを地獄少なゝゝゝを出ふ風ゝ法

人ガいる火燵の猛々敷賜の喩なる公喩坊ハく公ハ世俗ハ心法を猛ミバ在
少藏の中ふかる火ハ出ずとも一寸在てうるを指り合すまを）バ云へうと
微塵程の火ガ出ずこを用ハ時ハ何を思ふ生なる為ハ熱し飢を
紙防ぎ今銀羽織を盥しく移ふ扨ふ成るんどの功用ハ世界
世火ずくバ生ハ紙蓋ふくを拭ふまを）夜ハこを成ことをうぬん
かく言葉を極なを）ども油ふ与ふ云ふと云放てバ大ふ書を為
るうりちらバ彩ガあるうと石で彩ふ鐵板ちんふ節て刀を）ごを
彩るれバ為を彩ふかくるん霊ハ不思議なるとく心を用ゆる
ふ随くを）くふ働きを為ハいふ及ばずを）どを為ふ公
乃弱を夜放ふくハ光ふ赤大きふ書を為てるを伐突を）燈ヒちを
なるふ為ふく長恵乃功力ハを）バを為ふんと願ふ見ハ爪先ハを

きを為いるをふく刀を）どを見（次刀をものハ往ふ乃ふを為ふ
ふく言なるふ）ばとも又なるうてを弱ふ彩を為ふ彩を為すをを
言ハ不可思議不可説ふ）ひふを理るうふ為ふ迦かくるん強
坂ふうふ為ふの強を為ふ）ん家ハ釈尊を一字不説とふ
ふ四十九年説き為（ども一字ふ言ハ為ふ）ばを為ふ
ハ心法一字るんあり為を）バ彩乃（次不可得激ハるを為ハ彩要
なるを為ふ言ハ言ふ為ハ為ふ）一度ハ世界の玄常を
云ふふく蟲果ハ命ガ為ふくなるふ為ハいつガ始ふいつガ
終ふ為ハふるなく大ハ世界法界ふ為ふくあるとおふ
ふふ為ふく）題頭を為ふ）汝を為ふ禅伝ふ為）バ彼宗ハ元祖
九年面壁ふく悟道せふ為ふる直指人心見性成佛不立文字教

外別傳ゆえい或ハ馬祖の弟子弟佛祖ゆえ祖佛うんどの深よ宗味あり
紙知らぬやちくバ遠傳ハ甘ぎらず特文柳ち孫花ち紅と祖宗門
ふくハ小傳ゆえんどを法門ふういふるゆえされどを玉宗味ち知ぐるる
ぐ〜ぢを公入るふ〜く孫ハ青ちく孫ハ白ちく紫白ちむ〜さ紅と
ちろくてを）くふ影ち）緑花が咲出ち）どをを出るなの公祖祖
ちをごふ西ちるち）ゆ〜花女紙別ちくを兄（さるを）孫ち兄
ちが（ゆち）バ山ち柳ち孫花ハ孫と影ち出るを宗我宗ふくハ宗ふ
いつる有情祖情年本国去巷皆成佛ゆを説るるゆ是別佛心乃
西ら地隈ち微塵を歌なち）部双るゆ汝法佛公乃理具紙知ら
ざ孫ふ伝ゆく遠傳〜さ海ゆ地獄極楽ち佛の才役説ふ〜く宗ふ
ゆち事ちやゆふいひ〜祖見紙祖〜ゆら修機ふち地獄や瑛玉の

廳ち乃端乃祖ゆくを極楽や佛美薩乃ゆまぐを根かゆふ祖弟
双紙ゆ〜ゆち）ゆる遊云紙書伝ゆゆ足ぬ先ゆり人ふ第ち孫ち花嫌祖
が伝り玉の先又為を法ゆ他のいつを果すを云ゆ〜ぐ二巻ゆ
ける父悪ち然智ゆゆん少ゆ〜ち）バ宗お遠なきるゆを
西白く祖を玉ゆ〜尾出ゆが〜ち伝り伝ゆを想像ふ汝今八千伝りふく
就言なれごを見ふゆ出ゆぐ〜ちいふるや多く婦女乃ゆを書後弟
の伝り度〜ては常ふを玉ち）ゆゆ乃大宝が呼ゆゆ〜是を伝く推量する
ふ悪情様を豆清が書残ち〜ぢを〜立妄悪魔ゆを〜祖門乃縄伝を
捨一形卒然ゆ〜玉ち父悪〜脇孫ふ行業紙遠ぢ〜て寸遠ふ伝
塵の焼果ゆハゆりぬ〜ん後猿ゆゆ紙〜拾光ゆれバ父悪の業ちかる
紙〜ゆを〜ち抑ふ髪髪なる玉乃杉草紙常恒ふ拾ゆ〜悪情乃媒心なる

事語の多くなるに拘泥するは彼は無益なる邪正とを思ふこと能
わず世智を弄び見の方ふ云ふ義花ならん寔ふ学者
を暖く衣く飽まで吟ずは家は孔子を忘せるの
ゆるの世ふ多し是才能の不敏なるにやらんや是別
ふ云の因縁なり儒道ふも是を以て天命ふいふ故不義
ふしく出離をうく行ふ者ばかり因果の理ふ迷ふて猥ふ
名利ふ求ふるやうきは碎て執ふ沙弥ふ碎の上の垂と
なり樽ふ光せ禁門ふ樽中の虫ふなる是上古の書
ふ載せる是ふ出ふ汝ふ多く深く信ふかつなるから
ば生ふ物ふくは古言の虫となり高山ふ登ふ入らんこの
哀ふ云へるなり今おくきびせるべ一念懺悔の心を發し

ふ以正道ふ帰ふ故ふ真元ふ立帰らば学問生涯ふ誅て
故ふ古人の宗旨慧能禅師は一字不識ふして大悟し孫ふ
第六祖ふ成る故は博識宏才ふして陵落し竟ふ名聞
の道を発明し仏ふ成ふを思へば天地雲泥の遠ひ情平謬
の遠ひ禅師ふ成ふよりの以往ふ
故爾儒ふのやうふ云ふ地獄極楽ふなきるといふ孫ど
成ふ風来仏人を指へくいふ也ずや極楽ふんで忽ち成ふ悪病
云者の悪魔を祈る方便ふして貧ふ人ふ導く成ふ
ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ
乃ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ

かくまでよみたる八彼のこゝろにいふやうにとありさて風来空人にいはせ
し極楽浄土と何物に名を付て愚痴をすゝめ教ゆるは幼なし
く智ある人を導く教誨にはあらずしてかゝる諺云て書散
諸人は地獄をおそるゝ彼が背を忘れ恩を仇にて報ずる仏教か
る也へ迷はず雑言して仏の惑心を暁る汝極楽すれども焼
燋は無なる方便にして智ある人は其教にあらずといふも是ばこそ極楽
浄土へ往生せん教ふる持名念仏すれどもはげに直下に足らぬなれ
是一向念仏は深き訳ありて知られぬ也へなり持名念仏の訳また有ッ
事理の念仏あり事の念仏は浄土宗にて高下の機を撰ばず勧むる
深念仏なり理の念仏は焼燋の手段にも及びがたくて又禅家にては帰命念
仏或は幼心観仏すれども其観念仏高上の手段にして上々上根なれば也へ

及びがたき事なれば其宗には中々一朝一夕にて説きつくしがたし去ながら
易行道難行道の訳ありて念仏は勉め易き也へ彼がやうに凡下なるは往生す
ることかなはずとさる事極楽浄土往生は我にも教る智ある人は導くべき
教へにあらずといふは雑言甚しく自餘の宗門の例をもてなくは嘲る
的確なる公論ならざれば彼が方へ出る家なりし時初入の禅宗の事を述
ぶべし親に禅門一流の元祖達磨大師弥陀の名号并に四十八の弘願は
讃嘆せられてある教へ四十八字の偈頌に曰弘願一称万行宗致果号三字
衆徳根源不備工夫頓開覚蔵不蹈心地速登霊台意念超無念念仏
三昧生勝無生往生浄土也又大宋永明寿禅師の曰有禅有浄土猶如
（極楽ニ往生スレバ無生法忍ヲ悟リテ聖位ニ至ルナリ）
戴角虎尚云今時念仏他時成仏乎念仏心即仏也といふ初先の文の意なり
禅宗にてはつるゝは極楽浄土は我に念仏は勉むは喩へば角なき猛虎に角を戴る

ぶくふかく是ふかきほうもんハなきこのゆへ次の文を意を一心不乱ニ今
念佛を唱へく又十ぶつをもつてく極楽浄土ふ往生するふハ行ゝ住ゝ一念おゐ往生
ハ一念の往生一念乃佛念ゝ相應ゝ時ゝ往生ゝこの佛なる西へ今
時念佛ゝく使時成佛ちんや念佛乃心即佛ふ心ゝ是ゝ理の念佛
即心念佛ゝの意ふく云ゝ又圓照宗本禪師ハ臨濟宗ゝ豪傑
ふく常住念佛二昧なりしゝ京都職師ゝ云ゝ太德の禪伝或問ゝ
禪乃中乃極楽浄土ゝ感見すゝ一蓮花ゝ金字小大書して抗別
永明寺比丘宗本座ゝ云ゝ十字ゝ職公此書ゝ怪ゝく悔ふ影
徒ゝ浄場ゝく問ゝ云師ハ是教外別伝の法宗乃大德ゝ
何ゝ浄土ふ生ゝ意あるゝ坊ゝ宗本禪師答ゝく云
吾禪宗ゝ有ゝ法ゝ浄土ゝ坊ゝ来乃帰宿とする

乃ゝ職公の疑當ハ猶然ゝ汝ゝ彼宗ゝ法ゝ是
等ゝ為ゝ邪ゝく極楽ゝ悪廓ゝ者の娑婆ゝ方
役ゝく貪ゝ人ゝ導ゝく教ゝ為ゝ方ゝ
なゝハ法敵の大罪人なり宗ゝく邪ゝ今ゝ
邪乃禪徒と同ゝ云ゝて悟ゝ
ゝハ直ふ少ならん多ゝく念佛ハ
禪宗の祖師高德ゝく念佛ゝく極楽浄土
往生ゝ願ふの為なり）ハ自除の宗祖古哲ゝ
ゝ乃ゝく是ゝく云ゝ
佛法乃大海ゝ信ゝく能入ゝ
信ゝ功德乃母ゝ且法華經ふハ以信得入信佛語故

須やすら祈こめ佛語を毛頭擬ぶ一心に信ずるバ佛界に入るといふなり儒道ふかく專要とす又常を信ず最も
訓益の要ふして信ぜんじたいなバおのづから仁義禮智
常ふかなるべく行はるべきなり神を正直とかくいふ霊
命信なり信ずるこころの虚誕ふかく長どれバ邪曲となる
なるべし神を鏡を心象ふかく忘れ鏡ハ清澄
潔ふかく忘れも正直なるべしなれバ穢なるものハ徳
見ふ見ん悪しきを別かく又こころに隨ふくそれ
くも少しも顯顕依怙なく影をうつす別正直なるべし
寔神無鏡の中畧訓かなり見ふくしさこの神ハ正直
の首ふ座どころふて世人猿たやうに思ふく必ず神の影向
しくて人の頭ふ座どころ祈ふ世ふるふるあらんふ
ふふく明らるふ明らるふ赤ず心即神なり是紙正直の首に
やどるとふ神ハ直ふく清きのうち人ハ分るべふ
濁るなるものふく正直なるべしなれ
なるかくるん神なるべしなれ正直なるべ
正直ハ首ふ座どころふるべ派を濁りなる水ふハ月も影を
さ髪ごとも月新ふあらハ人ハ又正直信とふを
被ふ行ふ人神を祈神詠ふ
人に信ぜん道ふかるひなるいのらをこそ赤やちらん
ふるんのまるべふ信なのまバ正直なるべ正直なるれバ信なるべ
故ふ信ふ心なるまるべいのらんとを神を業に祈ふものふ

然らバ信の道にかなひがたしかるバ佛神を崇敬し或ハ神社佛閣
を建立し修補するにもおよばぬことの理屈をいはん人もあらバ
神を非とし佛を非とするものハ其道理をしらず一概に悪事
なりとしりて科を犯しこころにいふものをしりぬといふべきにしてまつたく非
理なり科ありとてハ法ぬすまずくとも欲きといふ道理なり佛神ハ
崇敬すべき筋あることいふにもあがむる者のことよくよく領
解しおもふべし又神ハ非禮を受給はずといへども罰利生
の厳重なるハ鏡の影のごとくそこに正直なる人の祈願に感じ
見給ひ贔屓偏頗をなし給ふことなくまた佛ハ慈悲
なれどもいかに祈るとも非義の願ハ聞給はず
佛法にも折伏摂受の二門の説をたて給へども神と同じ事なり

覿面に罰し給ふことハなし只に有縁の衆生を救ひ給へり
特に二佛の中間末世濁悪の衆生を救ひ給ふハ地蔵大士ハ
見佛聞名に延命經に説せさせ給ひて弟子の幾かとなく
なりとも又名號を念ずるかゆへなくとも給ふが縁となり
て三悪道に落し給へども假令地獄の猛火に一旦落ち
入りても其の縁によりて代苦受苦として罪人の苦に代
りかはりて苦を御身に受け給ひ且三悪道に
生ぜさせ給はんとの大慈大悲の誓願なれバ縁を結び
そのなしさ給はバ佛菩薩の上ふかくも三不能にて御身を分かち
給ひぬ三ッの中の随一縁なき衆生ハ度しがたきことにて下品の
無縁でハ済度も給はざりきこれによりて兼て結縁信心すべき

るまゝ一るすりされバ涅槃経に曰破法而不信故随三悪趣ニ此経文
のごとく彼施の栄(すゑ)此の葉(え)儒者や外道(げだう)邪なれども今の世後
世をそに附会(ふくわい)せりとて儒佛神の三教共に信心なくて八百道に
みちくも詮(せん)なし擬(ぎ)祈(き)頼(たのみ)にするもいとも六道のるすにすんでまだ
象式部が詠にも
我里そをそ志りしうきこそ志あかれし人の先の縁に信をな
ゆるさんよこしハあまのふねそ理のぬるし侍る只信ずれバ狐疑(こぎ)もん
たしかなるをもうごふやう佛(ふ)教をそに信ずべく剥破(はくは)作(さ)志くて侍る不
三悪趣の中へ真(まさ)に趣(?)されにあらぬんこともかすむべしさて一向先きたいの
人をば地水火風空の五大假(け)和(わ)合(がう)しく生じたるこそ五大なり元来織(けがれ)
なく天地の五大清浄(しやうじやう)にして同体なれバ自分の五大も清浄之

かく本来清浄なるそのうへに無始(むし)より己来(このかた)思ひ謬(あやまり)て不浄なる
貪欲(え)に浮(う)され不浄とも煩悩(ぼんのう)惑心(わくしん)妄想(まうざう)のさぬぐ共苦(くるしみ)なり
本来清浄にして一点の曇(くもり)なき明鏡(めいけう)なれどもされバ生子
に何の苦(く)があるべき人笑へバ笑ひ人の泣(なく)をみてハかなしき涙之
ながれが流れくもも曇(くも)りなく人哀(かなしむ)とも我かなしむ(ひま)バ哀
むべく人喜(よろこ)ぶこそも(ひま)の捨ひすれ(ひま)バ去ば是則鏡(かゞみ)の心になら
ば悲(?)ぬれバ鏡の心発(?)くる神にもなるなり佛にもなるなれバ
皆是客(きやく)塵(ぢん)煩悩にて縦バ旅籠(はたご)屋の客の宿(やど)るなれどの客のごとく
先はこれ(?)去(さ)れバ知らぬが入るかりさらぬ後ろるのかなまがれ
し誰(た)に煩悩の家(いへ)大きを拂へども又来るなれバ此心が増長(ぞうちやう)し
・為地獄餓鬼畜生の三悪趣と成(なり)得(え)しれ共後苦(く)を受(う)く

夫ば人天脩羅の三善道の感得なりされバ儒の性も佛家
の心性も違ひなきといへど禮記に云人生而静天性也感物而動性
之欲也と儒家にいふを則寂然不動の性といひ感じて遂通する
を情といふなり吾が佛道にてハ明静真心の性といひ是ハ理具
の方なり昏動妄念を情といひ是ハ事造の方にてあるなり是故
に首楞嚴云從無始來生死相續皆由不知常住真心性淨明體
用諸妄想此想不真故有流轉と説き給へり此一ツの真心なく
なん儒佛神ともに解脱することなく違ひ侍るとも落る所ハ一
つの谷川の水なるく真心に云ハなし是ハ佛の心是ハ神の
心是また人の心となる萬事にハなし されバ住吉八幡宮沙々貴
の信總の志ありし給ひし御神詠なり

慈悲佛すぐなるハ神まがるも人おなじ心を二つわけけり

かくなん御神詠を給ふおほしめして見れバ東の白紙神佛に敬ひ
まなしつきとなく我神佛を忘れずとも斯く志よるれく
佛の志あるハあまり忽にせらるれバ今世にて勿論もし福安く永く
後の世まで慈悲佛のあはれみ恵みを受ていかなる楽みをや極め
なん只よそぶるの心にて麻神佛にそまじく神を志りせんとするめぐく
生れ給ひて一切衆生を無始より未来くがへりまわりて顛倒
迷妄しるく六道の巷にて車の庭にめぐるがごとく生死
に流転し侍るのよ知らぬ哀れ上来雑言数面明白なる間
かくの如く汝も何とやなく風来せし人が倒に云時消ゆる火地獄へ
行や極楽へ行や汝けいを知しバ地獄極楽ハるとなるべし

ゆうしんいうとの法印道形法印拍子大小の伶人悟くふる先生方
義人と交ること是すでに迷い囂然うしあり愛の芸くるがごとく
ふくに出家乃志紙止く直ふ外道形ふ入義ふ変紙うさるて
速ひ因果紙撥ずきたるとを不悟しいるなり故に形道形学ふ
ふいかこいるかいるかぶる出乃ぶりてるを　ちくなくば是を
こハ法ぶ〜くあるふだうう〜庵毛紙周ふ行紙

すつをつそすきみかきあほむ藻屑や人ハ見るあ
ちらら

追加　志摩形八十余りみてく今りう東武浅草乃境内薬園へ
日ぬふ出家ハ人を集免浮世咏うん〜行くしやく〜也接打ち
一をよりこて寧寞を人宝と思惟きふと為行る
安紙乃れ法山のれくふ物ゐくく人ゆありてそのや思いん

後序

夫儒佛神乃三教ハ流紙志ふそのふたとくむう。儒を
学ぶ業ハ。佛教を誹謗し。佛者ハ儒学紙いるく。唯一
実神学ふとふそのを。佛法を嫌ふ。ハ志ら〜かがら人不
道いとふかきるる紙志ふ。ま因ふく来る慶ハ新世るり。
都ふ瑞祝ハ。茶を吸ふ。行くる紙ハ。磁題を針を吸
ふ。ぬきの曲者ふをすんぶ。かく形情さ。是を擇ぶく物ら
ぶ。有情うん紙。新世に越んやハ。志ら〜ふ。ハ。志学形ハ。そを
儒ふ。をあくふ。神道ハ。ふくふ。西ハ。を来ふ法ハ門ふ入る。東
乃茶ふ。ふ〜還り自仏を化ふ。其中ふ佛教をすくふ。新曲
実ハ基しきが少なくん。弔法仏を云とあるふ〜ふまかれが新世

紙雑芸〻敷んかさす紙バ流るゝ紙屑のちぢゃの乃放書するんど
ふゝあゝさ。ゆの影筆を形くぺたゝかゝぐ。さらバ姫孫たゝいはまみ。
評論せんかを思ひ之ゆ山。紙るゝさんもいゝ孫てゝ。俗書をゝゝや
戻し仕るぺちゃどゝを毫と牧くぺ。傑んかする公愛のよりゆ。ゝ悩を
牧筆くぺいかをいなゝよるゝ。撫る墨ハ濃く思ゝ。鳥羽ゆ。秋末
乃義略紙なとゝ志自。をどゝうゝ凡まゝ改や出ゝ。永ゝ。ゝ
ぬるゆ。あゝ岩ゝ。あゝ。ゝけバをゝ。ゝ。俗のゝ。ゝ紙
ゝゝ。か。戻ゝゝをいはどゝゝ。ゝ。ゝ。ゝがゆるゆをゝ紙。あゝ
ゝれぬるゝゝゝゆゝ。神佛佛ゆ三教を。鼎乃三笑ゆおゝ。一を
籟ゝゝ用なゝ紙。ゝ。一教ゆかゝゝゝ。僻史紙ゝ。ゝ。一助の
猶ゆゝを雪ゝんゝゝゆゝを蛾ゝ月ゆ。祐免ゆゝ。ゝ。宗乃ゝを。

あゝ振ゝ砂ゆゝの葉乃文紙かゝこゆつ免。葦嫁ゝせんを石ゆゆわゝ
次。ゝこゝ海ゝゝ。志ゆをゝゝゆゝ志ゆをゝ志ゆゝ

昭和三九ゝゝ年五月

不濤山人翠嶽庵新書